

平成 27 年病害虫の発生と防除

農林水産省消費・安全局 植物防疫課
農産安全管理課農薬対策室

I 天候経過の状況(気象庁報道発表資料より抜粋, 図-1)

1 2015年(平成27年)冬(2014年12月～2015年2月)の特徴

(1) 東・西日本と沖縄・奄美では、12月に強い寒気の南下による気温の低下が大きかったことから、冬の平均気温も低かった。東日本では4年連続の寒冬だった。一方、北日本では、1月以降寒気の南下が弱く気温の高い日が続き、暖冬となった。

(2) 日本海側の降雪量は、12月に強い寒気の南下に伴って平年を上回ったが、1月以降は寒気の南下が弱かったことから平年を下回った。その結果、冬の降雪量は少なく、北日本日本海側ではかなり少なかった。一方、北陸以北の本州の山沿いでは、降雪量や最深積雪は平年を上回った。

(3) 低気圧が北日本の東海上で発達し、北日本では北海道を中心に暴風雪となる日が多かった。

2 2015年(平成27年)春(3～5月)の特徴

(1) 南西から暖かい空気が流れ込んだため、春の気温は全国的に高く、北日本では平年差+1.9℃で、統計を開始した1946年以降で春としては最も高い記録を更新し、31地点で春の平均気温が観測史上最も高い値を更新した。

(2) 低気圧の影響で、北日本の降水量は多かった。

(3) 本州付近は移動性高気圧に覆われることが多かったため、日照時間は、北日本と東日本日本海側ではかなり多く、東日本太平洋側、西日本日本海側で多かった。

3 2015年(平成27年)夏(6～8月)の特徴

(1) 夏の平均気温は、6月に太平洋高気圧が強まり顕著な高温となった沖縄・奄美でかなり高く、7月中旬から8月上旬にかけて太平洋高気圧の張り出しが強まった北日本で高かった。一方、前線や台風、南からの湿った気流の影響を受けやすかった西日本では低かった。気温の高い時期と低い時期があった東日本では平年並だった。

(2) 前線や台風、南からの湿った気流の影響を受けやすかった西日本太平洋側と沖縄・奄美では降水量がかなり多かった。一方、東日本日本海側では梅雨前線の影響を受けにくく、降水量がかなり少なかった。

(3) 前線や台風、南からの湿った気流の影響を受けやすかった西日本太平洋側では、日照時間がかなり少なかった。

4 2015年(平成27年)秋(9～11月)の特徴

(1) 9月から10月にかけては日本付近に寒気が南下しやすく北・東・西日本では低温傾向だったが、11月は寒気は南下しにくく全国的に高温となった。秋の平均気温は北・東・西日本では平年並となった。

(2) 9月上旬と11月は低気圧や前線が本州付近を通過することが多く、北日本から西日本にかけては曇りや雨の日が多かった。特に「平成27年9月関東・東北豪雨」では記録的な大雨となった。一方、9月中旬から10月にかけては大陸から移動してきた高気圧に覆われることが多く、晴れた日が多くなった。

(3) 沖縄・奄美では、高気圧の勢力が平年より強かったため、気温がかなり高く、降水量がかなり少なかった。

(参照)

気象庁ホームページ

<http://www.jma.go.jp/jma/press/index.html?t=1&y=27>

II 作物別の病害虫発生状況の概要(表-1)

1 水稲病害虫(表-2(1)①; 図-2, 3)

病害: 本年は、台風や前線の影響で何度となく長期間の天候不順に見舞われ、そのたびにイネいもち病の多発と被害の拡大が懸念された。そのため、6月から9月にかけて、イネいもち病について、九州を中心に11県から延べ18件の注意報が発表され、防除の徹底が呼びかけられた。特に、6月から7月の梅雨の時期には、九州南部を中心に西日本で深刻な日照不足および長雨となり、葉いもちの拡大と穂いもちへの移行が懸念された。さらに、8月下旬から再び低温、多雨、日照不足の傾向が続き、穂いもちの多発が懸念された(図-2)。

昨年8月も西日本を中心に多雨、日照不足に見舞われ、注意報(17府県から延べ18件)だけでなく、警報が5